

23.2
高田半
502

元
神

卷之三

第21卷 第1号

特輯号

- | | | |
|-----------------------------|-------|----|
| 江沼臣と道君 | 米澤 | 一康 |
| —徳明純31年系所伝の再検討— | | |
| 古代の尾張氏について (上) | 新井喜久夫 | 10 |
| 松本藩水野家における正徳・享保期
の改革 (上) | 金井 圓 | 22 |
| 佐久間象山と越後 | 渡邊 廉一 | 33 |
| 美濃の土豪代官について (上) | 高牧 實 | 45 |
| —備中國岡田藩領地支配の事例— | | |
| 近世御用砥山経営史 | 五十嵐富夫 | 62 |
| 近世初期から中期における甲州金に
ついて | 齋藤 輝宣 | 77 |
| 上杉謙信の牙城春日山とその天守台 | 室岡 博 | 88 |
| 岐阜県坂下町附近における矢柄研磨
栗について | 原 寛 | 98 |

(四四)
九

〔隣県地方史学界の動向〕	
—昭和43年(1968)ー	
群馬県史学界の展望.....	丸山 知良 103
山梨県地方史学界の状況.....	清雲 俊元 105
岐阜県のあゆみ.....	吉岡 劳 106
富山県史学界の動向.....	廣瀬 誠 108
新潟県の動向.....	真水 達 111

信濃史學會

4

上杉謙信の牙城春日山とその天守台

室 岡 博

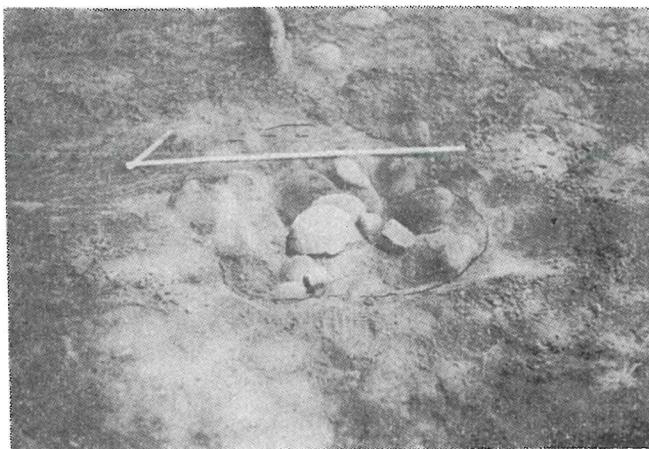
はじめに

首題を春日山とその天守台としたのは、春日山城(謙信は実城みまたはちが峯と呼び、春日山城とは呼ばなかった)の見方を、すでに公にされた研究とは趣きを変え、これまで実地踏査した新潟県内外の城跡研究体験をとおして論じてみることにした。そこで先づ昨年八月、考古学的な調査法を用いて探し当てたところの通称本丸の一角にある郭、天守台に現れた柱穴について述べ、次いで春日山城の繩張り、その機能を考究することとする。

天守台の柱穴について

昭和四三年八月六日、上越高等学校社会科クラブ山城班と上越城郭研究会員約九〇名とを三班に分け、本城地区(糸魚川商工・直江津高)揚手地区(柿崎高・安塚高)、追手地区(新井高・吉川高)、本部(高田北辰高)を分担、活動を開始した。私は本部統制役という立場上、春日山本丸に陣取ることにした。

さて、全体指揮に当つてみて、貴重な事実を体験した。それは、



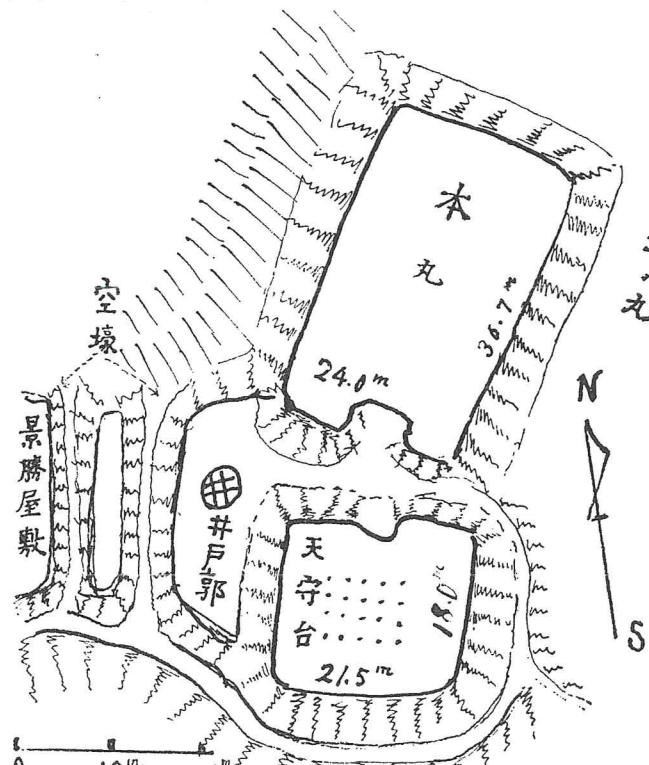
第1図 春日山城天守台の柱穴

極めて固いものである。拳大の偏平石(海岸近くの流れの強い川の石)がサークル状に所々にかたまっている。春日山は文化財指定地であるから、荒すわけにいかず、慎重に調査をはじめた。

まづ、石のサークル箇所から打診をはじめた。既に一応試みてあつたので、自信は十分であった。棒の先で地表をたたくと、固い自然地層と凹みに腐植土が入った堆積軟質土層では音が違う。次いで、レーキで表面を平に搔くと、黄褐色土面に、薄黒い円形が浮き出る。最初、南側のほぼ中央に第1図のよう

な柱穴が現れたときは嬉しかった。ただ松の木が生えている所と、流れ土の深い所は、レーキによる検出を遠慮し、検土壤器によつて、概略を探知した。

第1図は最初の柱穴で、円形黒色サークルの直径四〇厘米、深さ約一二〇厘米、石はつぶて石が落ち込んだというよりも柱と穴の間に突



第2図 春日山城本丸天守台(実測, 1:2000)

春日山城内総指揮の場は、本丸地区南端に突出する「天守台」と石標が示す一郭であることである。ただ揚手の下方郭群は、本城地区の何處に立つても望見できない。従つて「春日山の自然条件は、おのずからここに高矢倉を築かせ、城主をしてその上に立たしめた。」とも言えるのである。まして、万人に優れた謙信であれば、当然そうしたであろう。私は天守台に立つて、尾根・谷崖を猿のように動きまわる若人達を山上から見やつて、何か謙信になつたように、鎧・甲冑・采配を身につけた幻の英雄を気取つてみた。

天守台の柱穴は、昭和四一年四月、高田市が春日山の報告書をつくるために、新潟県文化財主任伊藤正一氏と私たち有志に計測をなさしめた際、私は先史考古学的感覚を働かせて、その存在を嗅ぎつけていたもので、今回は最初から平型レーキと検土壤器を用意しておいた。幸にも日本城郭資料館から西ヶ谷恭弘氏が来援されたので、関東や関西の山城における矢倉について指導をうけることができた。天守台の平面は、洪積土質、褐色で泥板岩混りの粘質土で、

永い年月の間、表土が西側に流れたらしい。もともと西側に約七米下つて、城の大井戸があるから、本丸とともに天水が井戸に流れるように築いたのである。東南隅の松の根が、たこ足状に浮き上っているの根方に堆積土が見うけられた。東面が、二の丸・三の丸に向いているので、自然土も五〇糰以上高くし、その上に土居を築き、なお、堀を土居の上に設けたように見受けられる。柱穴は当時少くとも七〇糰以上も深く掘り下げたものであろう。(第2図)

天守台にどのような建造物があつたかを究明する前に、春日山城の地選・地取りという城郭建築上の重要な要素を挙げ、いわゆる繩張り(当時は繩ぶりと言つた)を吟味し、かかる後に天守台(後に天守閣と呼称、城郭の大部の精力、経費をこれに注ぐようになつた)を考究してみることにする。

2 越後守護の府城と春日山城

越後が現在の境域をもつようになつてからの国府は、今の直江津市附近にあつたらしい。また、鎌倉幕府以後の越後守護の府城も直江津市附近にあつたことはわかつてゐるが、遺跡はこれまた不明である。室町時代の守護館も明かでないのに、危急時の要害が春日山城であることだけが判然としている。

私は昭和四〇年の春と夏に、三〇日間以上もお館ならびに越後国府の遺跡調査発掘(新潟県教育委員会と新潟大学および直江津市共催)に従事した。国道十八号線と八号線の接点に近い、直江津駅の西方北陸線と信越線が結合する北側地点にある「お館」は、関東管領上杉憲政が上杉謙信に援を求めた永禄年間に築いたと言われ、方二町(二

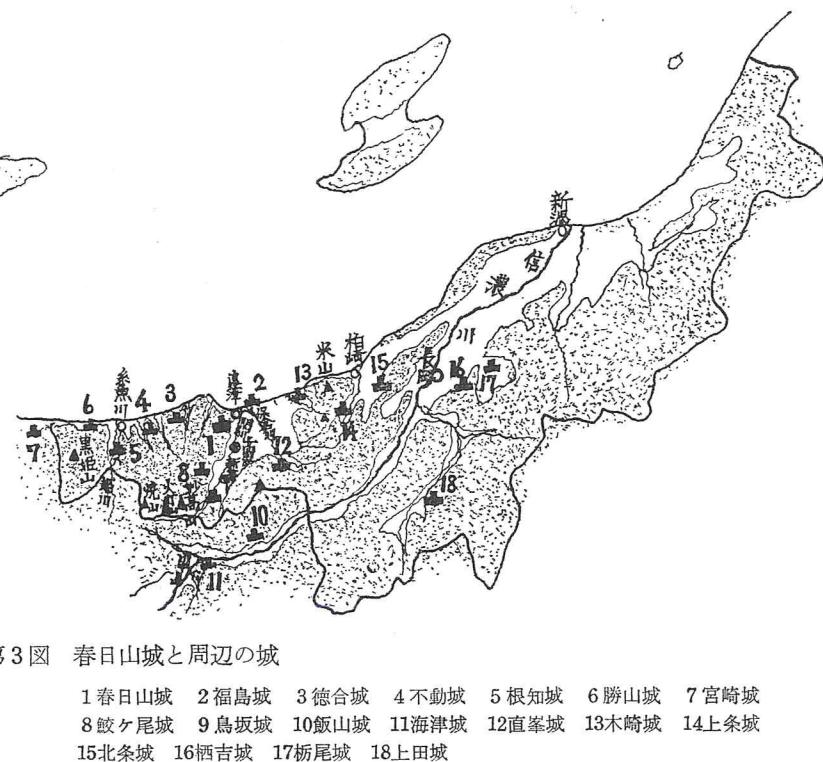
〇〇米)の正四方形、二重水濠に土居をまわした繩張りで、館の一部柱穴群が現れたが、掘立建造物で板葺であった(瓦は一片もなく、また、謙信は府中の住宅に、茅葺を廃して板葺にするよう命じている)。土居は二度も築き改められているが、柱穴が少い。ただし発掘は遺跡の僅かな部分に止まるもので、正確に永禄以後のものという断定には私は賛成できない。府中の都市構造や諸遺跡の位置からみて、永禄以前のお館もこの附近にあつたと私は言いたい。

平地の、土居と細い水濠では戦には弱い。そこで自然の立地条件に恵まれた春日山—お館の西南約三糠に戦時用の城が築造されたのである。この要害は家老職にあたる上杉家の執事長尾氏が守ることになつていて、応仁の乱後、天下が乱れるに従つて、春日山城は拡大強化された。戦乱が激化する永正の頃から、いわゆる下駄上の世となつた。官位をかさに古風な館にかまえた越後守護職上杉氏と山城の堅固に蟠居する武力の強い長尾氏とが、地位を転換するのは当然なことである。

3 春日山城の立地条件(第3図)

(1) 位置と地形

越後の国は日本海の汀線を絃として、越後山脈・三国山脈・妙高連峰などの日本海島脊梁山系を弧とする半月形の地形で、他地域とは截然と分離する孤立的地形である。越後守護府城と春日山城のある頸城地方は、これ亦、海岸線を絃とし、米山々塊・東頸城丘陵・関田山脈・妙高連峰・飛驒山脈の北端を弧とする半円形、これも孤立地形である。越後平野は広きに過ぎて統一しにくいが、頸城地方を城地となつた。



第3図 春日山城と周辺の城

1 春日山城 2 福島城 3 德合城 4 不動城 5 根知城 6 勝山城 7 宮崎城
8 鎧ヶ尾城 9 鳥坂城 10 飯山城 11 海津城 12 直峯城 13 木崎城 14 上条城
15 北条城 16 桜吉城 17 柄尾城 18 上田城

然の要塞地である。

(2) 高田平野は広く、しかも関川・保倉川・黒川等が緩流しており、兵站条件がまことに整つてゐる。

(3) 地味肥沃、魚介豊富、自然資源多く、殊に米・塩という不可欠な必需品が潤沢である。

(4) 日本海は遠方との交通を便にし、人や物の交流を援ける。

(5) 佐渡や能登と舟便をもつて金・銀・鉄等の資源を得た。殊に佐渡の産金量は日本随一であった。

(6) 海岸地方は名馬を産し、砂丘は人馬訓練の場として絶好であった。

(7) 住民は豪雪地帯特有の忍耐力と活動力をもち、従順であり、この地域は古来越後の首都であつただけに、文化性が高かつた。

(8) 中心城郭周辺の地形は、背後に妙高連峰や西浜連山があり、日本の愛宕谷・正善寺谷は深く、V字状形をなしていて、東に口を開く袋状地である。

(1) 標高一八〇米の鉢ヶ峯を中心とする春日山は、南波山系・桑取山系・谷浜連山と、春日山よりも高い山々に三方を囲まれ、その間の愛宕谷・正善寺谷は深く、V字状形をなしていて、東に口を開く袋状地である。

(2) 春日山々塊は地形上三つに区分される。

(1) 中央鉢ヶ峯(東面ざんちの谷、背面愛宕谷)
(2) 北側、通称城山(北側愛宕谷・南側但馬谷)

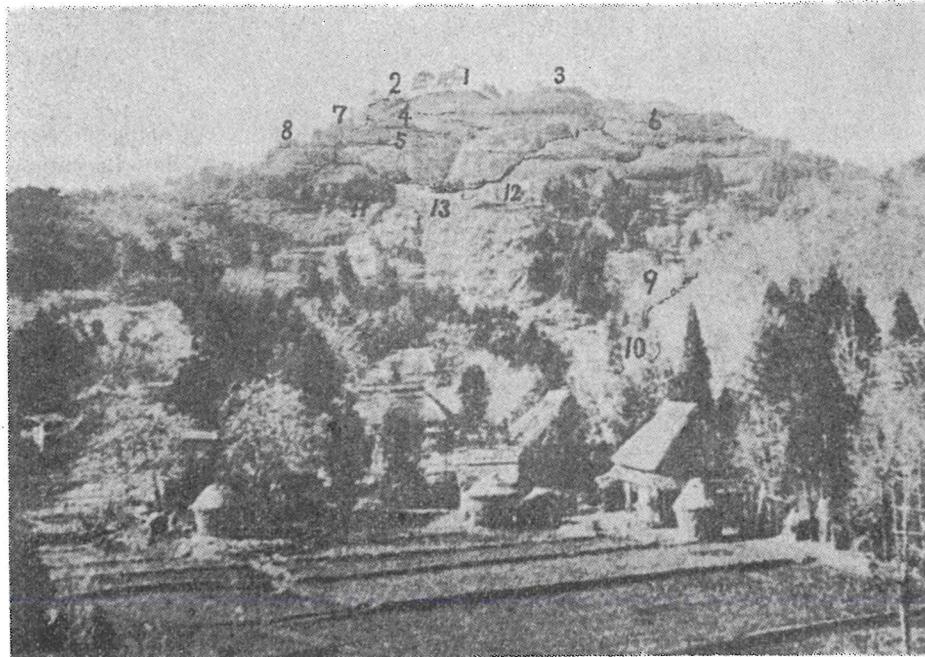
(3) 南側、通称小糟山と東部正善寺山(北側愛宕谷、南西側正善寺

すれば実に好適な守備守城地域である。

4 高田平野を内城とする城砦的立地条件

(1) 高田平野は三方が高い山脈に囲まれ、一方が海に面している自

多くの郭群があり、春日神社・林泉寺もほど近く、谷をへだてた
対岸にある。



第5図 春日山城址(東北方から望む)

写真は明治末期のもの、今は杉林のためよく分らない。

1本丸 2天守台 3諫訪明神・昆沙門堂 4二ノ丸 5三ノ丸 6直江館 7
景勝屋敷 8上田館 9御屋敷(よく見えない) 10黒金門(よく見えない)
11馬場 12老母屋敷



第4図 春日山城鳥瞰図

……線は谷間 ——線は当時の道 =印は空壕(掘切・横壕・縦壕)
1本丸 2天守台 3諫訪神社等 4二ノ丸 5三ノ丸 6直江館 7景勝屋敷
8諸武将館 9御屋敷 10蓮池 11愛宕谷 12堀の内 13林泉寺 14馬場 15番所
16但馬谷 17対馬谷 18正善寺谷 19御成街道 20大手道

(3) 中央、本城地区 鉢ヶ峯の鞍部を削平、南から(標柱名をとる)天守台、本丸、諫訪神社・護摩堂のある郭、お花畠と四つの方錐台が一列に並ぶ。西側は井戸郭以外は絶壁、東面には本丸下に帶郭・一の丸・三の丸が重ねられ、中腹以下は切崖となる。但馬谷・対島谷が深く切り込み、上部の広いW字形状に尾根が展開する。背面、僅かな尾根も中腹に空壕が何本か切られ、本丸への通路は天守台との間を掘切り、西へは井戸郭から二本の大空壕(上にはね橋があつたであろう)を渡つて二の堀(通称景勝屋敷)に通じる。本丸空壕を東へ下ると、帶郭が横走して、北方堀手(通称城山、または直江館)の頂部つけ根にある門郭を通つて、尾根伝いに下降する。二の丸・三の丸の南は絶壁、北に縦壕がある。

(4) 北側揚手地区 本城地区との接点から尾根は東へ屈曲、緩く下るが、南面は但馬谷に絶壁が続き、北斜面上半は高い切崖に囲まれて、下部郭群と一線を画している。通称「直江館」というが、広い郭が尾根伝いに東西にならび、老母屋敷と馬場の間がくびれ、ここに大空壕があった。直江館郭群のほぼ中央に二本の大掘切があつて、上方のは、本城地区の一の丸と帶郭をもつて結んでいる。揚手地区下半は、御屋敷・かもん屋敷・傾城屋敷その他数十の大小曲輪が重ねられ、西方は恐しい断崖(人切り沢)で谷は愛宕谷・蓮池となり、これまた山裾は高い切崖である。黒金門址は入口である。なお、高田平野口は堀の内と称し、ここに

(5) 南西追手地区 春日山の最弱点であつて、寄せ手(追手)が攻めかかる唯一の地帯である。二つの尾根が緩斜するからである。この地区には、景勝屋敷・上田館・かじやしき、その他部将館が無数にあり、そこに、西方物資輸送路がある「御成街道」や、部将登城の「大手道」が敵を誘い込む「追手道」をかね、大小空壕・横壕・水濠・泥田濠・切崖・土居と、道は全く迷路そのもののように曲りくねる。広場かと見れば、左右前後の館の土居や堀・柵から攻撃されるように複雑を極め筆舌では尽し難い。(第4図)

私たち、本年春以来十余度足を運び、共同研究したが、今もってこの地区を知り尽し得ない。殊に天守台下や景勝屋敷周囲の防禦普請が複雑で大がかりな点、そして大手道が、ざんちの谷から小槽の山にとりかかる所など、谷口の「番所」という小山をはじめ山と谷の複雑地形の上に、いたる所に削平地があつて、敵せん滅のために築いた兵術的要塞の堅固さには驚嘆せざるを得ない。雄大な地盤に加えて、微細な繩ぶりを如実に知り、春日山の真態を知るには、この方面について、草を分け、藪をくぐつて足労を惜しまず観察しなければならない。

なお、ここで、桜井広成教授の説を略記する。

春日山の大手(追手)は、確かに対馬谷で、その道は敵が一列か二列縱隊で登つてくるより外なく、それが、景勝屋敷と天守台の麓をそれぞれ半円形にまわり(現在も巾約三米、矢竹に覆われて、藪かげに残っている)、最後は、二の丸から本丸と昆沙門堂址間

の人口があつた)。

の小丘の間に達するので、敵軍は頭上や左右から城兵の射撃や投石を受けなければならぬ。全く力攻めでは陥ることのない堅城である。ただ、本丸地区が非常に狭小なのは、吉野朝か足利初期の山城であるからで、長尾為景(謙信の父)以後に根小屋ができるといふ伊藤正一氏(新潟県文化財主任)の説が極めて合理的な解釈だと思う。即ち蓮池(北方の愛宕谷の一部で、当時水壕が築かれ、その附近に黒金門址・御屋敷址などがある)は、山城としてみる場合、古文書にもあるとおり、搦手であつて、御屋敷の表門という意味では、大手とか大門と呼ばれるもあり得る。なお、「御屋敷」と「右近屋敷」とを併せると一町四方(一〇〇米四方)となり、戦国大名の邸宅の定形の広さで、表三分の一が御殿(七間、馬屋付遠侍、奏者の間、六間に七間の主殿、御烽火の間、御産の間、大台所風呂)裏三分の一が奥方の御殿とその台所、という形式によく合つてゐる。老母屋敷(今の春日山神社)は文字通り先代の未亡人の居所にふさわしいものである。その点では、甲府の武田信玄邸と全く同形である。

(文責任筆者)

要するに、春日山の陣構へは、平時においては本城地区については、城主が全兵力を支配し、城内を統轄する枢要な所、そして城主や世継・家老達が詰め、追手には多くの部将の詰所や城に必要な「かじや」その他の技術家を隠し置いた。搦手には、城主とその奥方の御殿、馬廻り衆(旗本)の詰所、即ち城主の親衛将兵を中心として温存していた。また、城外においては、周囲の丘や山の上に神仏の堂宇をおき、城下町は高田平野口に展開するようになっていた。(盛時六万

さて戦時籠城ともなれば、城兵は本丸に城主を守る。城主は城兵を総指揮し、本丸を最後の腹切りの場と決意する。大手は敵を迎えて主戦場で、長期決戦に堪えるだけの陣地を築いていた。搦手は味方兵力をかくし、温存できるように、固く、見えない。知られないだけの配慮手段をつくした所である。築城記に「追手(大手共)へ敵つく時は、搦手より切て出るよう不可捨也」とある。

戦のための構えとして、前記のように土居・切堀り(山の尾根)・横(水壕、空濠)濠・泥田濠があるが、細かいものでは、重要箇所には柵として木を立て並べ、逆茂木(竹は枝を落さず、けそぎ尖らした)を並べ組み立てた。土居上には堀(土堀・板堀・木柵)を造り、堀にはザマ(弓鉄砲を射るのぞき穴)を設け、所々矢倉を建造し、高い所からねらい撃つた。迷路は木戸の内外に舟形を造る外、道をかざと屈曲させ、切崖の間や濠の間に敵を誘い、ねらいうちできるようにした。これらは近世城郭にも言えることで、このことはすでに山城時代から工夫されていた。本城と大手・搦手の繩張りは、大小の差はあるでも、みな共通したものももっていた。県内の山城は、大きいものでも、春日山の三地区の一つの地区に該当する程度である。春日山は数万の越後軍を収容し、北陸・信州・関東へと兵を進め、堂々天下に覇を競つただけに、実に壮大、かつ堅固なもので、さすがは上杉謙信の牙城であると、感歎させられるのである。

6 天守台の建造物について

天守台削平面に現れた柱穴と、その配置状況は前記のとおりであ

(1) 天守台は春日山頂、本丸の一角にあって、搦手地区の「御屋敷」附近が見えないほか、他は殆んど視界に入る位置にある以上、当然指揮所と監視所を兼ねた高層建造物であったと思われる。

(2) 本丸と列ぶ高さにあり、城のどこからも、また、城下からも、遠方からも領民が仰ぐ城の象徴部であるから、堂々と美しく造くなられたであろう。

(3) 柱穴配置や柱穴の大きさからみて、越後の北西季節風や猛烈な吹雪・豪雪に堪えるよう太柱を深く埋め立て、強力に何層か(少くとも三層)床を組み屋根・下見をあて、日夜の警備監視に支障のないようにしたであろう。

(4) 遠方からの狼煙や早鐘の急報を受ける所としても高層でなければならぬ。

(5) 本丸とは空壕をもつてへだて、三方が全然人が登れない切崖に囲まれている一郭であるから、戦に必須な武器武具・秘密品などの倉庫も兼ねたであろう。火気の点からも安全地帯である。そのため、北側の虎口(こども)に門を設け、周囲に土居・ザマのある土塙も構えたことであろう。

(6) 山嶺一帯に枢要郭群が逆Z字形に配置されている鉢ヶ峯の中心地の突角に位置し、本城地区は言うまでもなく、追手・搦手を掌握できる絶好の指揮地点にあるから、当然、謙信は厳然と天主台

上の楼上に立つて眼を輝かせたであろう。それだけに貧弱な構造でなく、本丸御殿に次ぐ立派なもの建造したと思う。

(7) この位置は、敵が本城に攻め入る咽喉口に当る所で、追手地区から攻め上った敵は井戸郭にとりつくか。急斜面を横切る帶郭の大手道を進むより外ない。眼下の敵を攻撃する石つぶても多量に貯えていた(現在もたくさん頂面に散在する)であろうし、弓の矢も鉄砲弾丸も用意されていたであろう。

このように考えると、建造物は、やがて近世初頭に現れる豪華な天守閣には及びもつかないにしても、三層以上白かべ、そして窓や狭間のある高樓がつくられたと思われる。

7 天守台の機能

天守台の機能は、総指揮・監視・連絡・防禦・最重要物藏庫を兼ねていたが、その機能は、春日山城の頭脳であり神經でもあつた。したがつて、春日山の生死の鍵を握っていた。

その権威の歴史は、永正以前は恐らく大したものでなく、謙信の父為景が越後の戦乱を鎮撫する使命感の重圧とともに強化されたものであろう。謙信が十九才にして城の主となつた頃、父為景は四面楚歌のうちに死去、兄晴景は統領の才に欠けていた。越後の土豪たちが復び乱麻の如く相争う事態に彼はこの天守台に立つた。幼時、林泉寺の天室光大和尚に訓陶された。和尚は豪放かつ謹厳、禅理に徹した教育を受けただけに(天室は柿崎氏に招かれ釋迦寺で死んだ、その思想、人柄を象徴する禅書が釋迦寺に遺存している)、若き日の天守台上の謙信は、苦腦に堪えなかつたであろう。救世済民の悲願も主家

上杉と長尾の葛藤、名門上杉のすたれゆく事態、長尾一族の相尅、土豪たちの帰属、国外の戦雲等々、謙信は天守台から見渡して、天下の名城の勇姿に恐らく勇氣づけられたであろう。そしてこの理想こそが、まだ城は堅固でなく、為景は定実を奉じて越中に逃れた。翌年、顯定戦死。為景は府城と春日山を回復した。このとき春日山城を修築した。

やがて、足利氏から越後守護職・関東管領の命をうけ、いよいよ天下の名門上杉の名において和平への戦を進めざるを得なくなつた。天室和尚の教育力は、謙信をして人間性と社会正義を貫かしめた。そして毘沙門天の化身にみづからを任じさせ、撓まない精進、悟道の道を歩み続けさせた。

天守台の機能は、南方信濃の川中島に、或は関東に、続いて北陸から京都に向って働きだした。そのための準備としての治政・経済の実績も、この天守台から観望できたが、惜しくも天正六年三月一三日、遂に倒れ、この天守台も、復び目前の争いに終始する事態を観望することになってしまった。

8 春日山城の歴史

最後に、春日山城の歴史を簡単に述べておこう。

長禄の頃(元禄元年)、今の直江津附近にあつた越後守護職上杉氏の館(屋形と呼び、上杉氏をお屋形様と言った)の非常時退避場として春日山に要害を築いた。そして家宰である長尾氏にこれを守らせた。永正三年(1506)、長尾能景越中で戦死。為景、越後守護代となる。翌年、守護職上杉房能を亡す。守護職の養子上杉定実(上杉の分

家上条家→柏崎の南→より房能の嗣子となつた人が越後守護職を継いだ。
永正六年、房能の兄、関東管領上杉頼定(上条上杉から関東山内家へ養子に入った人は房能の仇を討つべく越後府城と春日山を攻めたが、まだ城は堅固でなく、為景は定実を奉じて越中に逃れた。翌年、顯定戦死。為景は府城と春日山を回復した。このとき春日山城を修築した。

享禄三年(1500) 上条上杉憲房反乱、この頃、城外の館を春日城内にうつした(根小屋形式となつた)。

天文五年(1536)、長尾為景没し、晴景国政をとる。やがて守護職上杉定実の養子問題がこじれて、越後は大いに乱れた。

天文一七年、上杉定実のとりなしによつて、謙信は兄晴景に代つて春日山城主となる。

天文一九年、越後守護職上杉定実没し、子が無く、謙信が越後守護職となる。

永禄五年(1562)、関東管領上杉憲政、追わられて謙信に援を求める館および春日山城を拡張強化した。

天正六年(1578)、謙信没し、養子景勝と景虎(北条氏康の子)が家督争いを起す。「お館の乱」という。越後軍は両派に分かれて戦う。翌年景虎自刃。

慶長三年(1598)、上杉氏会津移封、堀秀治 春日山城主となる。堀監物春日山を修築、監物濠を築く。

慶長一二年、春日山廃城、堀氏は直江津の東方海岸に築いた福島城に移つた。このとき、春日山城の土居や謙積みが崩され、石を福島城に運んだ。

参考文献

布施秀治 『上杉文信伝』
井上銳夫 『上杉謙信』

高田市文化財調査委員会編『高田市文化財研究報告書』春日山城編

上越高等学校社会科クラブ山城班編『上越城方における中世山城の研究』

『越後野誌』

日本城郭研究会編『石郭史研究』
人物往来社編『日本城郭全集』新潟県版